降臨節第 2 主日　B 年　　聖餐式・説教　　2017 年 12 月 10 日

主よ　わが岩よ　わがあがない主よ　わが口のことば　わがこころのおもいを
みこころにかなわしめたまえ　アーメン。

今日はバイブルサンデーと呼ばれている日曜日です。1549 年、今から約 470 年前、英国国教会は祈祷書を制定します。それは第 1 祈祷書と言われるものです。降臨節（アドベント）は 4 回の主日がありますが、その祈祷書では、それぞれの主日に意味を持たせ、特別な特祷を設定し、お祈りするように指定していました。第 1 主日は「キリストが与えられたことを感謝する主日」、第 2 主日は「聖書が与えられたことを感謝する主日」、第 3 主日は「イエス・キリストの降臨の備えをする主日」、第 4 主日は「再臨の備えをする主日」と言うようにテーマをつけていたのです。それを受けた英国聖書協会は、「聖書が与えられたことを感謝する主日」である降臨節第 2 主日を、「みことばの主日」（バイブルサンデー）として特別な日曜日と定めました。英国聖書協会の意図は、すべての人に福音が伝えられ、聖書が一人でも多くの人に読まれることを願って「みことばの主日」を設定したのです。その意図が全世界に広がり、日本聖書協会でもこの運動を起こし降臨節第 2 主日を「バイブルサンデー」としたのです。わたしたちが以前(1990 年以前)使っていました文語の祈祷書では、降臨節第 2 主日の特祷は「我らを教うるために聖書をしるさせたまいし主よ、願わくは、これを読み、ねんごろに学び、かつ味わいて魂の養いとなさしめたまえ」と祈っていました。

その伝統が口語の祈祷書から変わるのです。特祷に「聖書」という祈りは全くありません。何故、変えたのか、と調べて見ますがはっきりしません。かえって、何故、英国聖公会が第 1 祈祷書で降臨節第 2 主日を、「聖書が与えられたことを感謝する主日」としたのかと疑問を持たされるのです。

降臨節は「主の日」、それが「終末の時であろうが」「到来の時であろうが」、その「主の日」が来ることを「待つ」、「待望する」という季節であります。それ故に、カトリック教会や古い伝統を守る教会は、降臨節では「主の日」を待つということに触れている聖書の箇所が読まれ、待つことに関しての祈りが祈られていたのです。

現在わたしたちが使用しています口語祈祷書は、世界の諸教会（カトリック教会）の流れに合わせて改正されています。ですから、降臨節第 2 主日は、英国聖公会の第 1 祈祷書の流れから修正されたものとなっているのです。そうしますと、第 1 祈祷書から生まれた「バイブルサンデー」には、意味がないことになりますが、そうではありません。バイブルサンデーは歴史の中から生まれてきたものです。バイブルサンデーの目指す意図は大切なものです。その意図を守ることに意

味があるのです。バイブルサンデーにはこんな歴史があったことを覚えていてください。バイブルサンデーに関してはこれぐらいにしまして、本来の降臨節第 2 主日のことに戻りたいと思います。

本来、降臨節は「主の日（終末、到来)」を待つ季節であるとし、礼拝では祈りと聖書は「待つ」ことに関したものを用いると考えられてきました。福音書の中では、洗礼者ヨハネがその 1 人であると考えられ、洗礼者ヨハネの物語が聖餐式聖書日課の福音書として選らばれています。しかし、注意してみますと、「どうして」という疑問が湧いてきます。それは、今日の降臨節第 2 主日 B 年は、マルコによる福音書 1 章 1 節－8 節が選ばれています。洗礼者ヨハネの物語です。しかも、A 年もC年も洗礼者ヨハネの物語なのです。加えて、降臨節第 3 主日の福音書 A 年、B 年、C年も洗礼者ヨハネの物語なのです。このように同じような出来事が集中して選ばれることは、他には見られません。福音書の中には、「イエスの誕生を待つ物語」や「救い主の来臨や終末を待つ物語」は沢山あります。何故、それらの中から選び、読まれないのでしょうか。あえて教会はそのようにしていないのです。そこには意味があるようです。それは洗礼者ヨハネとイエスとの間に、特別な関係があることに気づいて欲しいと願って、そのようにしているのではないかと思われるのです。その関係について、今日はみなさんと考えて行きたいと思います。

洗礼者ヨハネは一体何をしたのでしょう。彼は荒野に現れ、「「悔い改めよ、天の国は近づいた」と告げ、人びとにヨルダン川で洗礼を授けていました。

洗礼者ヨハネが洗礼を授けていた「時」は、ルカによる福音書 3 章 1 節によりますと「皇帝ティベリウスの治世第 15 年、ポンティオ・ピラトがユダヤの総督、ヘロデがガリラヤの領主・・・・アンナスとカイアファが大祭司であったとき」とあります。さらっと読みますと、「ああそんな時代か」となりますが、そこには大変なことが書かれているのです。まず、皇帝ティベリウスがいます。そしてその支配下にユダヤの総督ピラトがいます。そしてその支配下に領主のヘロデがおり、その支配下に大祭司がいるという、社会の構成図が書かれているのです。実際には、大祭司の下にも、まだまだ沢山の支配者がいたのです。権力を持つ者の搾取の中で民衆は生きていました。現代でも「孫請け」という言葉がありますが、大企業から仕事をもらった中企業が、小企業に仕事をまわして、お互いが利益を上げているような組織図があったのです。力のない者たちは、権力者からのおこぼれで生活をしていました。彼らは貧しい生活を強いられていたのです。10％の権力者が国の 80％の富を独占していたと言われています。20％の富を90％の貧しい人が分け合って、生活をしていたことになります。いかに、実力あ

る者が搾取をしていたかが明らかであります。多くの人は不満でした。そんな社会ですから、ちょっとしたことで暴動が起きます。支配者たちは、安定した社会を望んでいました。社会が変化することを恐れていたのです。

洗礼者ヨハネの洗礼は「どこで」洗礼を行っていたでしょう。それはヨルダン川でした。何故、エルサレムではないのでしょう。エルサレムは政治・経済の中心地で、多くの人々が集っていた都市です。洗礼をエルサレムで行えば、より効率が上がるはずです。しかし、ヨハネは洗礼をヨルダン川で行っているのです。イエスの宣教もエルサレムではなく、ガリラヤで行なわれていました。エルサレムは力ある者、力を持って何かをやろうとしている者が住む場所であったのです。一方、ヨルダン川やガリラヤは、エルサレムから追い出された者が住む場所だったのです。ヨハネは、貧しく力弱い者たちへの希望のメセージとして、洗礼を奨励していたのです。

洗礼者ヨハネは「何故、洗礼」を奨励したのでしょう。ユダヤ人にとっては、洗礼は目新しいものではありませんでした。ユダヤ人には沐浴という習慣はあり、聖なる神の前に立つときには、まず水で体を洗わなければならなかったのです。そして、イエスの時代、異邦人がユダヤ教に改宗するときの条件に、洗礼を受けることがありました。ユダヤ人は神から選ばれた民、「選民」でしたから、罪を洗い流す必要はなかったのです。ですから、洗礼を受ける必要はなかったのです。ユダヤ人が洗礼を受けるということは、ユダヤ教の教えを無視したものだったのです。そのユダヤ人に対して洗礼者ヨハネは、罪を悔い改め、洗礼を受けよと迫って行ったのです。反社会的な教えを奨励していたのです。それに対して、社会に不満を持ち、自分たちの住む世界が変わることを願っている人びとは、伝統的なユダヤ教の教えとは異なる洗礼者ヨハネの教えに引かれ、希望を持ってヨルダン川に集まり洗礼を受けていたのです。その様子は、マルコによる福音書１章５節に「ユダヤ全地方とエルサレムの住民は皆、ヨハネのもとに来て、罪を告白し、ヨルダン川でヨハネから洗礼を受けた」とされています。悔い改め、神に立ち帰ることによって、この貧しさと苦しみから解放される、という期待をもってヨルダン川に集まって来ていたのです。

このように洗礼者ヨハネの洗礼を見ていきますと、普通とは異なる異様な光景が見えてきます。エルサレムから離れた、荒野のヨルダン川の周辺に、洗礼を受けるために多くの人々が集っているのです。当時の指導者たち、社会が平穏で安定を望んでいた人たちにとっては、大変なことが起きているとしか考えられなかったはずです。目の届かない所で、自分たちとはかけ離れたことの何かが起きて

いるのです。いつ社会構造が変わるか分からない状態です。権力を持つ人々にとっては、どうにかしなければという考えが出てくるのは自然なことです。そこで、最終的には、洗礼者ヨハネはヘロデから抹殺されるのです。

洗礼者ヨハネは、「罪の悔い改めを求め、洗礼を受けること」を求めました。そして多くの人たちはその要求に応えました。罪を告白し、洗礼で罪を清めることをしました。しかし、何かすっきりしないものが残っていました。それは罪を告白したが、「罪が許された」という確信がなかったのです。その「罪の赦し」をもたらす方がイエスであったのです。はっきりと「そのあなたで良いのです。あなたは赦されたのです」ということばが必要だったのです。

マルコによる福音書１章７節で、洗礼者ヨハネはイエスのことを「わたしよりもすぐれた方が、後から来られる。わたしは、かがんでその方の履物のひもを解く値打ちもない。わたしは水であなたたちに洗礼を授けたが、その方は聖霊で洗礼をお授けになる」と言っています。権威をもって「罪の赦し」を宣言し、その赦しをもって人びとに生きる力を与える方が必要だったのです。その方がイエスであると、洗礼者ヨハネは言っているのです。わたしは、イエスの歩む「道を整え、その道を真っ直ぐにするためにやって来た者である」、と洗礼者ヨハネは自分のことを語っているのです。洗礼者ヨハネのやったことを補って、完成させたのがイエスであったのです。「赦し」は神しかできないのです。

マルコによる福音書は「神の子イエス・キリストの福音の初め」(1：1)ということばではじまります。わたしたちが物を書くとき、その一番初めのことばに気を使います。マルコは、短いことばをもって「イエスは神の子であり、イエスの存在が福音だ」と言うのです。イエス自身が良きおとずれであるのです。それは、洗礼者ヨハネとの関係を通して、「わたしたちの罪を赦してくださる方である」ということを明らかに証明しているのです。わたしたちの罪は赦されるのです。悔い改めると「それでいいですよ」と言ってくださるのです。「もちょっとしっかりと生きろ」ではないのです。そのイエスの誕生日がやってくるのです。その日をみなさんで、喜びをもってお祝いしたいと思います。